



廣瀬川

第80号

平成24年
8月6日

仙台市小学校長会

発行者／野澤 令照（会長） 責任者／石野 勝美（広報部長）

主張

未来を拓く教育の創造 ～復興の先にあるものをめざして～

会長 野澤 令照（寺岡小学校）



仙台市小学校教育研究会長から一通の文書が出されたのは、5月半ばのことであった。研究会に所属する各教科・教科外部会の部会長に宛てたものだが、そこには強い思いが込められていた。震災体験を乗り越え、時代を切り拓く力をもった子どもを育むために、各教科・領域等において、震災から学ぶ教育、復興を目指す教育の推進を呼びかけるものだった。各部会からの反応は予想以上のものがあり、積極的に展開するという報告が相次いだ。

近隣の小・中学校や地域と合同で取り組んでいる事例も様々生まれている。仮設住宅の人々との交流、児童会を中心とした支援活動の実施、小・中学校と地域が合同で行うまちづくりへの取組など、校長の強いリーダーシップの下、地域の特性に応じながら、復興教育の実践に向けて着実に歩み始めている。

校長一人一人が思いを共有し、復興教育の創造という一つの目標に向かって歩み始めていることは、校長会としての凝集性の高まりを示すものであり、今後の活動に大きな期待が生まれている。

仙台市小学校長会としては、こうした復興へ向かう気運をさらに高め、未来を見据えた社会づくりを成し遂げるために、仙台発の未来型教育モデルづくりを目指す「杜の都の創造的復興教育実証研究プロジェクト（仮称）」を立ち上げた。今後、5年先、10年先を見通しながら、一步一步着実な歩みを重ねて

いく覚悟である。

仙台には、歴史や伝統、豊かな自然、大学や企業の集積、そして市民主体の広範な活動など、これまで積み重ねてきた多くの成果がある。新たに発掘する資源と融合させながら、さらに磨き上げ、未来に継承する取組が重要である。

仙台市教育委員会では、地域とともに歩む学校を教育推進の基盤とし、仙台版生き方教育である「仙台自分づくり教育」、学校・家庭・地域の連携を深める「協働型学校評価」、学校を核とした地域コミュニティの充実を図る「学校支援地域本部事業」などに力を注いできた。大震災を経て、いずれも今後の教育になくはない取組であることが再認識されたが、市民一人一人が輝ける人生を送り、仙台を持続可能な活力あるまちにするために、教育への期待がますます大きくなっている。

わが郷土の祭り・仙台七夕まつりが開催されている。今年も市内全ての小・中学校から集められた数万羽の折鶴がメインストリートに飾られ、復興と鎮魂の祈りを伝えている。大震災後に生まれた取組が、伝統の祭りに新たな価値を生み出している。

被災地である仙台から、復興の先にある新たなまちの姿を発信していくことが、これまで支え励ましてくださった多くの方々への恩返しになると信じている。希望の光へ向かって、力強く歩み続けたい。

おもな内容

○主張	1
○特集・復興	2
○学区紹介「地域とともに」	6

○提言「復興を担う学校教育」	8
○仙台市小学校教育研究会から	10
○退会者からのメッセージ	11
○編集後記	20

特集・復興

仙台市の小学校が取り組みたいこと

震災から学ぶ教育活動の推進と展開の工夫

東六番丁小学校 渡部 力

1 はじめに

仙台市南西部の高台から、太白区中心部の街並みと若林区のほぼ全域、そして、その奥に広がる太平洋が眺望できる。毎日、心に刻んでいる景色がある。太平洋に注ぐ名取川河口を挟んで見える荒浜辺りから仙台空港周辺である。震災後、海岸線が広い範囲で見えるようになった。家屋に遮られて見えなかった海岸線である。青々と広がるはずの畑や黄金色の稲穂が揺れるはずの田んぼは、いまだに表土をさらしたままである。痛々しい光景だ。

2 仙台市の小学校で取り組みたいこと

私たち仙台市民は、千年に一度と言われる大震災に立ち会った歴史の証人である。地震の恐ろしさだけでなく、日本人の優れた国民性や高い精神文化などを後世に伝えたい。地域に見られたすばらしい取組を再確認し、それらを学校と地域で共有する学習を実現したいものである。

私たちに求められていることは、震災後、学校や地域で起きた様々な出来事について、体験を通して学ぶことである。突き付けられ、対応した困難、克服した困難、力付けられた言葉や支援、考え続けたこれからの生き方や在り方などを取り上げ、震災から学ぶ教育活動を展開し、全国に発信することである。

3 意味のある教育活動にするために

震災から学ぶ学習は、グローバル化する社会でおきる諸問題を解決する学習と同じである。なぜなら、「知識基盤社会」を担う子どもたちに必要とされる「主要能力」が、課題解決に必要な能力そのものだからである。この学習が、一人一人の子どもにとって意味のある学習となるために、以下の二つに力点を置いた実践を目指したい。

(1) 地域の人々の生き方や文化に学ぶ学習

子どもたちは、自然環境や社会環境など、様々な環境の中で学び、成長していく。地域には子どもの成長に必要な学習環境がたくさん存在する。震災後、地域に展開した出来事を取り上げ、そこに関わった人々の生き方や在り方に学ぶ学習を展開したい。地

域には、子どもたちを引き付け、学びを触発する人々や取組、文化がたくさんある。

震災を体験した今こそ、地域の教育力や地域に残しておきたい意味のある活動を学校教育に取り入れ、心に刻む絶好の機会である。教科・領域の特質にふさわしい学習内容を整理し、実践を積み重ねたい。

(2) 継続的・組織的な学び

学習や活動には継続性が求められる。体験を昇華させ、意味や価値のある経験にするためには、一過性の活動では不十分である。学校の取組が地域と一体化し、一つ一つの取組が、子どもにとって意味付けされた活動になっていくことが必要である。

例えば、本校で取り組んでいる「故郷復興プロジェクト」の中で行っている挨拶・ごみ拾い運動は、地域の方々や保護者に案内を出し、活動を呼び掛けている。高学年児童は、ランドセルにメッセージを貼り、通学路のごみを拾って登校する。年間6枚になるメッセージは、卒業前に来賓や保護者の通る廊下に掲示する。この取組は、次のように広がる。

参加した来賓が、変化・成長する子どものメッセージを見取り、町内会だよりで紹介する。校長は、そのことを校長室だよりや地域の機関誌、会合等で紹介し、子どもたちに注がれている地域の温かいまなざしや支援に感謝する。学びは、学校と地域に信頼関係を築き、一人一人に充実感を残し、循環していく。

4 おわりに

今年度、「仙台市教育振興基本計画」に基づいた教育の諸施策や取組が始動した。仙台市が目指す今後10年の教育の姿は、「人がまちをつくり まちが人を育む『学びのまち・仙台』」である。教育振興基本計画は、学びの循環性に期待を込めている。

復興の担い手が子どもたちの世代に引き継がれるその時、希望をもって課題に立ち向かう大人であってほしい。学校は英知を絞って震災から学ぶ教育を展開することである。要諦は、学校に地域の教育力を取り入れ、地域の有形無形の財産を地域と学校で共有し、組織的・継続的に学んでいくことである。

特集・復興

震災体験・支援を生かした教育活動

新潟県長岡市立四郎丸小学校との交流

四郎丸小学校 岩瀬 幸市

1 交流のきっかけ

東日本大震災から 2 週間が過ぎた 3 月 25 日、四郎丸小学校卒業式の日に、新潟県長岡市立四郎丸小学校赤城児童会から手紙が届きました。

「テレビで地震のニュースを見ていたら、四郎丸小学校という字が突然画面に現れ、すごく驚くとともに、テレビで地震や津波の様子を見るたびに、とても心配していました。新潟と仙台、遠く離れていても人ごとのようには思えませんでした。そこで、何かできることはないかと話し合って寄付金を集めることにしました。この寄付金が少しでも力になればいいなと思っています。みんなで応援しています。」という内容でした。

義援金と励ましのメッセージも添えられており、早速、子どもたちに紹介しました。同じ名前を持つ小学校が他にもあること、その学校の子どもたちが、我々を心配してくれていることを知った本校の子どもたちは、感謝の気持ちを DVD に込め、長岡市立四郎丸小学校へと送りました。これをきっかけにして、絆ができればという思いを込めて……。

2 交流への機運

本校の送った DVD を、長岡市立四郎丸小学校では、全校朝会で見たそうです。そして、この全校朝会を契機に、「もっと大震災のことを勉強したい。被災地の様子を知りたい。ボランティアにも参加したい。仙台の四郎丸小学校にも行ってみたい。」という気持ちが子どもたちの心に芽生えたそうです。

そこで、子どもたちの考えを踏まえ、保護者とも相談の上、赤城児童会 30 人が、宮城を訪問することになりました。

3 本校での交流

10 月 11 日お昼頃、長岡市立四郎丸小学校 5、6 年生児童 30 人、学校職員 7 人、保護者 4 人の合計 41 人が、バスで本校にやってきました。前日には、石巻の長浜海岸でボランティア活動を、そしてこの日の午前中には、名取市閑上地域を見てきたそうです。あまりにも悲惨な光景を目の当たりにして、子どもたちは、声も出なかったそうです。

本校に着いた時も、非常に緊張していましたが、徐々に緊張も解け、笑顔あふれる和やかな雰囲気の中で交流会を進めることができました。長岡市立四郎丸小学校からは、自分たちで作ったあおぞら米 50kg をいただきました。本校では、震災当時の炊き出しメンバーが震災時と同じ状態でカレーライスを作り、一緒に食べてもらいました。

最後に「ぼくたち私たちが震災から学んだこと」をテーマに、互いに意見交換をしました。その時、出てきたキーワードは、「協力」とか「感謝」とか「やさしさ」でした。

4 思いを引き継ぎ

やさしさは、経験した者でないとわからないと言います。中越地震を経験した新潟の皆さんは、全国からやさしさをもらった経験があったからこそ、今回大変な思いをしている東北のために、すぐに動いてくれたのだと思います。

今回、やさしさをもらった我々は、このやさしさを誰かに返さなければいけないということをお話朝会などで、話してきました。

すると、本校の児童会でも、長岡市立四郎丸小学校の思いを引き継ぎ、私たちより、もっと大変な思いをしている学校のために、募金活動を始めようということになりました。その活動の様子を聞いて、わざわざ学校に訪ねてきて募金をしてくれたおじいさんや、今まで、ずっと貯めてきた小銭がいっぱい入っている貯金箱を丸ごと届けてくれたおばあさんもいました。善意の輪がどんどん広がる様子を見て、心が温くなりました。

5 これからも

実は、今年の秋休みにも、長岡市立四郎丸小学校の 6 年生が修学旅行で宮城を訪れ、本校と交流をもつことになっています。ゆくゆくは、新潟と宮城の中間地点である会津を修学旅行の行く先とし、そこで、交流を図ればと考えています。2 校の交流を通して、やさしさや感謝の気持ちが、学校に、そして地域に広がっていくことを願っています。

特集・復興

震災体験・支援を生かした教育活動

同じ仲間として絆が深まることを願って

柳生小学校 春日 文隆

1 はじめに

未曾有の被害をもたらした3.11東日本大震災。その記憶は一年を経過した今でも生々しく残っています。そのような中でも、互いに助け合い、励まし合っていた人々の姿が忘れられません。実際、私が赴任した時には、地域の団体である柳生南かやの木会では被災校へ雑巾等を贈る支援を開始していました。また、PTAではランドセルや体育着などを集め、震災で転校してきた家庭へ寄贈しようとする動きがスタートしていました。

2 夏物衣料・図書の寄贈

4月のPTA役員会の集まりの折に、当時の会長から、仕事関係で仙南に出かけた時に、被害が大きかった学校を見てきたが、支援ができないものかという提案がありました。私からは、同じ仙台市内の学校でも、被害の大きかった学校があるので、よければ、同じ仲間として、支援をしたいと話しました。話合いの結果、当校から比較的近く、転入児童もいた荒浜小学校と東六郷小学校に支援をすることとなりました。

それまでは支援物資（衣料）と言っても、冬服が中心でしたので、これからは夏服が不足するだろうと考え、集める服は夏物にしました。ちょうど、物資（衣料）を贈った時期から暑くなり始めましたので、大変、喜ばれました。併せて、避難所生活で大好きな本を読む機会もなくなっていると考え、被災校の友達への励ましの手紙を添えた図書も寄贈しました。



集めた衣料の仕分けをする保護者

3 協働型学校評価の重点目標に「思いやり」を

協働型学校評価の重点目標を決める時期でもあったので、昨年度からの「あいさつ・言葉づかい」の

目標に加え、「思いやり」の目標も設定し、PTA・地域の皆さんと協働で社会貢献・奉仕活動に取り組めるようにしました。実際に被災校へ支援する体験を通して、同じ市内に住む仲間として、共に励まし合い、協力しようとする気持ちを育みたいと考えました。

4 PTA主催行事「柳生フェスティバル」へ招待

支援物資を集めるほかにも、運動会の際に、保護者や地域の方に呼びかけ、被災校への義捐募金を実施しました。集まった義捐金で両校の子どもたちの教育活動に役立つ物を購入することにしました。荒浜小学校には防犯用タックルバンドと反射板シールを、東六郷小学校にはラミネーターを寄贈しました。

残金と学用品のバザーの売り上げを使って、秋休みに開催するPTA行事「柳生フェスティバル」に両校の希望する保護者と児童を招待しました。バスをチャーターする計画でいましたが、被災により住まいが分散していたため、行き帰りをタクシーで送迎することとし、その交通費に充てました。



「柳生フェスティバル」オープニングセレモニー

5 継続した支援を

2年目を迎え、両校ともいまだ他の学校を間借りしての授業実施となっています。一年で支援を打ち切るのではなく、複数年度にわたって支援を継続しましょうとPTAの皆さんとも話し合っています。今年度の春の運動会では、福祉委員会の児童とPTAの方とが協力して、支援募金を一緒に実施しました。秋には、また、柳生フェスティバルに招待し、交流を深めたいと思います。そのことが、協働型学校目標の「思いやり」の実現にもつながるものと考えています。

特集・復興

震災体験・支援を生かした教育活動

西多賀小学校受け入れがくれた喜び

—共に過ごし支え合った心の絆—

富沢小学校 郡山 孝幸

本校は、西多賀小学校と大野田小学校を母体校として、児童を両校からほぼ半数ずつ集め、平成22年4月に開校した。学校は分離したが、2年を経過した今でも、地域のスポーツの場では元のチームに所属するなど、活動と交流が継続している。

3月11日、西多賀小学校の西校舎が損壊したことを知り、本校職員・児童一同心を痛め、何か手助けをしたい、本校で受け入れたいとの思いを伝えたが、「高学年がいない状態でのスタートはできない。全校児童揃って新学期を迎えたい。」という西多賀小の判断も当然であった。ただ本校教職員及び児童に対し、本校としてはいつでも迎え入れることができるよう心構えをもたせた。

西多賀小5・6年生は体育館に段ボール製の間仕切りを設置し授業を開始したが、他教室の声気になって授業の効果が上がらないなどの課題が当初からあり、さらに夏に向かう中で温度が上昇していくことも大きな問題となっていた。そこで、夏季休業終了後から仮設校舎完成までの期間、本校で学習する方針が出されたのである。

いよいよ西多賀小を受け入れる初日、体育館においてお迎え式を行った。懐かしい出会いに喜んでいる子どももたくさんおり、終始和やかな雰囲気では進められた。最初に、本校児童が西多賀小学校の校歌を歌って迎えた。本校児童から西多賀小児童に、校庭に咲くヒマワリ・コスモスの花を贈った。「大空に向かって元気に伸びてほしい」という気持ちと、コスモスの花言葉である「愛情・調和」の通り「仲良く助け合う」というメッセージを添えた。私は西多賀小の子どもたちに「本校の施設を十分活用して充実した学びが行えるよう願っている。このような縁で一緒に生活することになったが、互いに助け合い高め合い楽しく活動できるよう応援する。」と語りかけた。

第57回仙台市小学校陸上記録会を前に、壮行会を合同で行った。両校選手の決意表明の後、実際に競技のデモンストラーションを行った。全力で走ったり跳んだりする姿を目の当たりにし、子どもたちは両校選手に惜しめない声援を送り交流を深めた。当

日スタンドからの応援では、ごく自然に両校がエールを交換し合い、お互いの健闘を励ましたたえ合った。その子どもたちの姿がとてうれしく涙が流れるような思いであった。西多賀小の選手は不自由な環境下、これまでの練習の成果を発揮しベストを尽くした。本校の児童にも忘れられない一日となった。

その他、決して多くの時間はとらなかったが真の心の交流は様々な場面で見られた。例えば、夏休み明け行ったあいさつ運動。朝、両校児童が学校の垣根を越えてあいさつを交わした光景は大変清々しいものであった。また本田技研工業の皆さんの協力で行った“A S I M O”の授業も両校児童で受講した。多くの失敗と挫折を乗り越えて歩けるようになったA S I M Oの研究・開発の過程は、我々の復興に向けての取組に重なって映り、一層の励ましと多くの元気をもらったようであった。

両校の共同生活も終わりに近い10月下旬、昇降口前ホールでは西多賀かしわ太鼓の演奏が鳴り響いた。「かしわ太鼓」は西多賀小の伝統芸能である。「にしたがーかしわだいこー！そーれ！」の掛け声で始まった迫力あるパフォーマンスに本校の子どもたちは大歓声。以前演奏した経験のある児童は一緒に掛け声をかけていた。

11月1日、お別れ式。西多賀小の児童は、感謝の言葉に添え、覚えたばかりの富沢小校歌を歌ってくれた。この後両校全員で「ふるさと」を合唱した。短時間ではあったが、感動的な式となった。私は「西多賀小の2か月間の行いはとても立派だった。校舎内外で明るい挨拶をしてくれた。富沢小から別れていくことに寂しさを感じる。このまま通ってきてほしいと心から思う。しかし、1年生から4年生までの友達が待っている西多賀小学校に戻って、今以上の力を思う存分発揮してもらいたい。」と伝えた。

両校の子どもたちが今後もそれぞれの学舎で生き生きと学校生活を送るよう心から願う。さらに、ほとんどの児童は同じ中学校で学業にいそしむのである。3か月間、共に過ごし支え合った心の絆を胸に、助け合いながら強く強く生きてほしい。

学区紹介 地域とともに

震災の教訓を生かした
地域との防災訓練

旭丘小学校 仲野 繁俊

旭ヶ丘地域には、結成から 9 年目を迎えた守り隊の組織があり、毎日朝夕、児童の安全を見守っていただいています。また、旭ヶ丘ホテルとメダカの会は、地下鉄駅前の台原森林公園のホテルを13年前に呼び戻し、ホテル祭りを開催して、街中の貴重な自然環境を守る活動に尽力しています。児童は、地域の方々と一緒にホテルを守る活動を通して、自然や命の大切さを学んでいます。

3.11の発災後、学校と協力して避難所の運営に当たった連合町内会は、23年度に町内防災委員会を立ち上げ、地域防災組織や計画の見直しの具体的な検討を進めています。

防災対策委員会との情報交換は、発災後の引き渡しや避難所の開設の手順、関係機関との連携の仕方等、様々な課題を浮き彫りにしました。そこで、防災訓練は、関係する方々と顔合わせしながら、学校の防災教育への取組の様子を実際に見ていただき、

発災後の対応の課題を情報交換し、学校や地域の防災対策に活用できるように計画を進めました。

防災訓練の日、児童は、防災朝会、学年に応じて工夫した防災教育（气象台の方の出前授業や児童館長さんのサバ飯作り等）、防災給食、引き渡し訓練。防災対策委員会、区の防災担当係長、市民センターの方々は、防災朝会、情報交換、短時間の授業参観。PTAは防災教育のボランティアや救命救急法等。地域を含め、多くの方々に御協力をいただきました。

防災訓練は大がかりなものではなく、あの日の教訓から課題を一つずつ整理し、地域と共有し、協働して具体策を検討していきたいと思います。今回の訓練で確認できたことは、初期対応です。体育館に各町内会、学校、他地域、帰宅困難者等のシートによる区割りと表示、シート配置図を地域と学校の防災マニュアルに共通掲載、夜間発災時の体育館開錠の方法等、地域と具体的な対応を意見交換しました。

震災の教訓を風化させないよう、防災訓練や防災対策等に生かし、お互いの顔が分かる関係を築きながら、今後も起こりうる災害に備え、地域との連携・防災意識を一層深めていきたいと考えています。

学区紹介 地域とともに

地域の方と一緒にいった通学路の点検
—震災の教訓を生かして—

秋保小学校 金子 倫昌

「おはよう。」「校長先生、おはようございます。」朝、正門前の横断歩道では、登校する子どもたちと私との間で、元氣な挨拶が交わされる。

目の前の道路は、かつて仙台から山形・山寺に向かう最短ルートとしてにぎわっていた二口街道。平安時代に山寺・立石寺を開基した慈覚大師が開いた道と言われている。この道は、今も仙台・山形間の主要道路の一つで、交通量も多く、交通事故が懸念されるが、幸いにも過去約20年間、児童の大きな事故は起きていない。

昨年の大震災は、安全・安心は普段からの備えや努力によって培われること、過去の安全・安心は必ずしも将来の安全・安心を保証するものではないことを教えてくれた。

このことを念頭に、年度始め、従来の交通指導隊や交通安全協会に加え、今年度新たに太白区役所秋保総合支所の地域振興課の方の協力も得て交通安全教室を開いた。それに併せて、PTAや関係諸団体

の方々と一緒に「事故の可能性を想定した安全点検」も行うことにした。

まず、1年生の通学路の歩き方や道路の横断の仕方を観察した。次に、実際に通学路と一緒に歩き、児童の目線で支障がないか、危険箇所はないか点検した。その結果、幾つかの課題が見つかった。

- ・正門から西へ約200mは、直線道路になっていてスピードが出やすい。朝は多くの車両が通行するにもかかわらず、狭い路側帯しかないため、子どもたちは前後の車に気を付けながら歩かなければならない。
- ・直線からカーブになる所は、交通事故の起きる危険性が高い。
- ・通学路でありながら、横断歩道ではない所を横断せざるを得ない箇所がある。
- ・マンホールに段差があり、つまずきやすい等

これらの課題については、その場で解決の方向性を話し合うとともに、今後も地域や関係諸団体の方々と連携して対応していくことにした。

これからも、地域の各関係諸団体との連携を一層深め、複数の目で点検と指導を繰り返しながら、子どもたちの安全確保に取り組んでいきたい。

学区紹介 地域とともに

人と人とのつながりを生かし
笑顔あふれる燕沢に

燕沢小学校 熊谷 和裕

燕沢小学校の前身は、明治6年に開校した小鶴小学校でした。明治の半ばに燕沢村、小鶴村などが岩切村と合併すると、学校はなくなってしまいました。昭和に入り東仙台小学校ができると、燕沢地区の児童は岩切と東仙台に分かれて通うことになり、地域の人々は燕沢に学校を建てたいと強く願うようになりました。熱心な学校建設運動を経て、昭和49年に燕沢小学校が開校しました。

地域の皆さんは、現在も学校への思いが強く、学校行事や食農教育などに積極的に協力くださっています。3月11日の大震災の際も、町内会の方々や歴代のPTA会長さんが学校に駆けつけ、避難所対応や復旧活動に進んで取り組んでくださいました。

故郷復興プロジェクトで行われる挨拶運動には、地域の方々も参加します。毎日の登校時と下校時、地域の皆さんは交通安全のために、また、防犯ボランティアとして、通学路に立ち子どもたちを見守っ

てくださいます。このような地域の方々に感謝の気持ちを込めて元気に挨拶すること、また、地域の方からも進んでお声掛けいただくことを協働型学校評価の重点目標に掲げ、「明るい挨拶が響き合う燕沢」を目指しています。

学校関係者評価委員会では、挨拶の相手を「学校の仲間」だけでなく「家族」「お客様」「近所の人」などと明示することで、挨拶運動がより盛んになるのではないかといた御意見をいただきました。今年度は、相手を意識させた指導を行っています。

そして、挨拶をきっかけとした人との関わりを生かして、自分の思いを伝える力や相手の気持ちを考える心を養いたいと考えています。

人と人とのつながりが深い燕沢地区のよさを生かして、これからも地域の力を学校へ取り入れ、子どもたちが元気に頑張る姿を地域へ発信していきたいと思っています。



学区紹介 地域とともに

地元学地域連携事業
1年目にあたって

幸町南小学校 今野 和賀子

本校は、幸町小学校から分離開校26年目を迎え、現在の児童数は365名である。用地難から校地が市道で分断される形になり、校舎と校庭を専用のペDESTリアンデッキで結ぶ学校となった。学区は東西約1.3km 南北0.4km で、農地及び工場跡地等に、大型店舗及び市営住宅や県営住宅、民間高層マンション等が林立し、人口密度は極めて高い。開校当時から転勤・転居に伴う児童の転出入が多く、永年居住する住民が少ないという事情を受け、「近隣の協調関係や郷土意識の高揚を図るため、学校及びPTA・町内会・体育協会等総力を上げて努力」（初年度「学校要覧」より）してきた経緯がある。

たとえ「通過地点」だったとしても、物心つく頃に地域の人や歴史にじかに触れ、様々な関わりの中から興味を喚起することで、自分の育ったまちや地域に愛着と誇りをもつことが可能になるのではないかな。昨年の東日本大震災で学校が地域のよりどころ

になったとき、改めて地域の持つ教育力や地域の中で共に生きる大切さを感じさせられたように。

本校は、これまでも市民センターを窓口、地域連携の一環として、「学校行こう隊」「生涯大学」の方々に昔遊びやしめ縄づくり、戦争体験を聴く会等でお世話になってきた。そのパイプを太くし、子どもたちが地域との触れ合いを通して地域をもっと知り、年代を超えた関わりから学習に対する積極性や意欲、地域を大事に思う心を持つきっかけを作りたい。

そんなことを考えていた矢先、幸町市民センター白鳥館長から声を掛けていただき、「地元学地域連携事業」に参加することにした。幸い、地元には「さいわい歴史探訪会」があり、現職教育の一環としての学習会や、児童向け幸町地域の史跡めぐりガイドウォーク等も可能だという。

早速、幸町市民センター、幸町南連合町内会、探訪会のお力をお借りして、学区地元学推進委員会を立ち上げることにした。今後、幸町地域に伝わる踊り等が発掘されるかもしれない。来年度の運動会からは学区大運動会として一本化する。地域と一体となって取り組む姿勢を忘れずに進めていきたい。

提言**復興を担う学校教育****今 後 の 課 題**

1 地区副会長 日下 渉 (金剛沢小学校)

東北地方太平洋沖地震が起きてから早いもので 1 年 4 か月が過ぎた。あの時のことを思い出すと、先生方は本当によくやってくれたと思っている。

地震が収まり、子どもたちを校庭に避難させ、保護者に引き渡すとともに、続々とやってくる避難者への教職員の心温まる対応も見事であった。

さらに、地域の方々の避難所運営も町内会長さんを中心に、暖房、炊き出し、寝具、トイレの管理など、多岐にわたり心配りをしていただき、スムーズに運営できた。

これらのことを踏まえ、復興を担う学校教育の役割について述べる。

これまで学校での避難マニュアルは概ね地震だけのものではあった。津波については、ほとんどの学校で深く考慮されていなかったのではないだろうか。

そこで、一律の避難マニュアルではなく、海沿いにある学校では、津波を含めて避難マニュアルを見直し、地震直後の避難行動のあり方を指導する。また、山沿いや津波の影響を受けない地域の学校では、

大地震の避難行動について、学校の避難所運営を含めた避難マニュアルを見直す必要がある。

そして、最後は、どこにいても自分自身で身を守るという意識を育てておくことが重要である。

次に、学校が主体となり、地域の町内会長さん方を中心とした災害時の避難所運営などについて、事前に打合せや訓練を行うことも必要である。

また、避難生活では、水や食料の配給や避難所の清掃など、避難者の方々がボランティアとして活躍したことを忘れてはならない。

そこで、学校においては、教科や道徳の指導はもちろん、校外学習や総合学習などで思いやりの心を育てることが必要となる。もちろんボランティア活動についても様々な体験活動を通してその意義などについて指導する。

最後に、授業時の避難所開設は学校が主体となる。このことを踏まえ、災害時における教職員の役割分担について校内研修の充実を図るとともに、災害マニュアルの見直しを行っていくことが必要である。

提言**復興を担う学校教育****震災から 1 年以上たって**

2 地区副会長 杉田 通世 (北中山小学校)

3 月 11 日の大震災では、学区内で発生した土砂崩れで地域の方が一人亡くなっている。間もなく 1 年 4 か月になる今、現場は復旧し、悲しい出来事があったことを忘れさせてしまうほどきれいに整備されている。震災後、地域では防災の備えに取り組んできた。学校も、子どもの安全を守ろうと非常時の対応を検討し、家庭に周知するとともに様々な訓練をしてきた。

職員は、学校としての「責務」の大きさを子どもとの関わりを通して実感してきた。家庭や地域からの学校への感謝と期待は、職員の意欲を高めるとともに学校の頑張りを支えてくれた。今、職員は、職員間のコミュニケーションを図りながら精力的に仕事に励んでいる。学級づくり・授業づくり、保護者との教育相談などを通して、学校の取組に対して保護者・地域からたくさんの支援をいただいている。

子どもの本分は「よく遊び、よく学び」であろう。震災後は、生徒指導面で気をつけたい子どもの言動に対して、保護者間の大きな意識の違いに驚くことがあった。ごく少数かもしれないが、隠れていたも

のが表面に現れたのかもしれない。場の設定・話し合い・情報の共有などに留意して、学校・家庭・地域の協働的な取組をなお一層具体的に周知・実践していくことが大切になっている。

重点取組事項の一つである外遊びは、体を鍛え、人間関係を鍛えるものと考えている。学校だけでなく、帰宅後も子どもたちは空き地や公園でよく遊んでいる。問題行動等に対しては、家庭・地域で積極的に声を掛けてくれる。改まらないときには学校に情報を寄せてくれる。子どもたちには、相手への思いやり、地域の期待、公共心などを学ぶ機会にしている。

今年度は創立 20 周年記念の年である。学校を支えてきた方も大分高齢である。学校・家庭がそれぞれの役割を確かめながら地域の活動に積極的にいかかわるとともに、特に家庭の理解を深めながら家庭が一層前向きに関わることが期待されている。これから目指す子どもの姿の実現に向けて、学校・家庭・地域で連携を工夫し、協働して実践していきたい。

提言**復興を担う学校教育****防災対応能力の育成と共に故郷の素晴らしさを伝えたい**

3地区副会長 石垣 富一郎（通町小学校）

大震災以来2度目の新年度を迎え、あの雪混じりの寒さの中、余震の怖さに震えながら引き渡しを待った子どもたちも3年生以上となった。当時就学前の1・2年生についてはどのようにあの震災を体験したのだろうか。今、学校での被災体験を共有するのは全児童の3分の2だけである。

6月、大地震を想定した避難訓練を実施した。発災を告げるサイレンの音とともに防災頭巾をかぶり速やかに机の下に避難した子どもたち、引き渡しを想定しランドセルを背負っての二次避難も私語や混乱はなく、実に迅速に行うことができた。訓練とは言え、自分の命を守るその真剣な表情や行動に学年差や年齢差は感じられなかった。被災体験は風化することなく自助の意識となって生きている。

本校では、今後も状況に応じて冷静な判断や避難行動がとれるように想定を変え避難訓練を実施していくが、その根底にあるべき防災対応能力を育むために全学年の指導内容をその視点から見直してグラウンドデザインに新たに位置付け、教職員の共通理解

のもと各教科、領域にわたる指導を進めているところである。

ところで、今年度最初の故郷復興プロジェクトとなった5月11日、本校では「笑顔であいさつ 感謝の心をとどけよう」という協働目標の下、自分たちでできることとして通学路や公園の清掃活動、花苗の植え付けを行い、改めて地域への感謝の心を共有した。日頃から登下校の安全を見守り、生活科や総合的な学習の学びを支えてくださっている地域の方々への感謝の気持ちを伝えたいという一心で活動し、地域からお褒めの言葉をいただいた。

今、防災対応能力の育成とともに欠かせないこと、それは子どもたちの郷土愛を育むことである。

本校では、この視点に立ち、生活科、総合的な学習での地域を学ぶ学習の見直しを行い、発達段階に応じた学びの内容、系統性を再考した。低学年のうちから地域の人々に学び、歴史、文化、街並み、産業を学んで、故郷の素晴らしさを認識させる指導の取組が始まっている。

提言**復興を担う学校教育****新たな防災教育の取組**

4地区会長 田野崎 博（北六番丁小学校）

2011年3月11日、校舎内に衝撃と振動が走り、その後、児童の保護者引き渡しと避難所開設が同時に始まりました。海外メディアの一部は津波被害の大きさを日本沈没と報道しました。その日から1年余り、復興に向けて、各校に防災主任がおかれ、新たな防災教育の取組が提起され、始動しました。

これまでの防災教育の多くは、災害時の行動や態度を教える教育が中心でした。しかし、東日本大震災を経験した私たちは、災害から身を守る必要な資質や能力の形成とともに災害を回避し生き残った後に、互いに助け合い、互いを思い合うこと、思いやりを持つことといった人間の関係性を重視した教育の必要性をより痛感しました。

安全教育の目的は、生涯を通して安全な生活を送る基礎を培い、進んで安全・安心な社会づくりに参加貢献する資質や能力を養うことにあります。また、防災教育は、自他の生命を守るために的確に行動できる力、防災対応能力の育成を目的としています。

災害から命を守り、安全・安心な社会を構築する

資質や能力を育成するためには、進んで他の人々や地域の安全を支える自助の力・共助の力の育成が必要です。

本校は、災害時の危険から命を守り、支援者としての意識を高めるために、自助・共助の力を育む防災教育の在り方を主題に実践を始めました。稚拙ですが下記の4点がその概要です。

- (1) 東日本大震災の経験や課題を踏まえた災害対応力・防災対応力の向上
- (2) 災害被害を軽減し、自助・共助の意識を高める教育課程の工夫と充実
- (3) 災害対応に必要な知識と技能の習得を可能にする教材の開発
- (4) 地域とともに参加・連携する防災訓練の実施

私たちは全国からの心温まる支援に励まされ、現在に至っています。自然災害等の危険から命を守り、主体的に行動する能力や態度、被災後は支援者として地域社会に貢献する意識や態度を育成し、皆さんの御支援に応えたいと思います。

仙台市小学校教育研究会から

希望に満ちた未来につながる
復興教育を目指して

仙台市小学校教育研究会 会長 関東 正春（南材木町小学校）

8 月の仙台は、仙台七夕を迎える季節でもあります。今年も昨年に続き、一番町を中心とする七夕会場には商店の七夕飾りに混じって、震災復興への児童生徒と教職員の思いを結集した鎮魂の折り鶴が、夏の夜空を彩ることでしょう。東日本大震災から 1 年 4 か月余り、この間、教職員を例にとってもどれだけ多くの人々が親族・家族、教え子たちの犠牲に胸を痛めたことでしょう。また、どれだけ多くの人がいまだに癒えぬ心の痛手をかかえていることでしょう。震災で犠牲になった方々の御冥福と、いまだ不自由な暮らしを余儀なくされている方々の一日も早い復興を願わないではいられません。

さて、大震災から子どもたちは様々なことを学びました。豊かな生活を享受していて忘れ去られていた大事なものに気付いたこと、家族や友人を失う苦難に遭いながらも、前に進もうとするひたむきさ、皆が困難な状況下にある中で自分がどんな貢献ができるかを考え、自ら動き出したこと。支援物資の搬入の手伝いや、避難所のごみ拾いや清掃などのボランティアを自ら志願して行動する子の姿も見られました。いずれの場合も、「自ら考え、自ら行動する、生き抜くための力」が見られた場面でありました。

復興元年と位置づけている今年度、仙台市では、東日本大震災の教訓を踏まえ、地域社会一体となった「復興」と「新たな防災教育」の推進、並びに震災で心に傷を受けた子どもたちの心のケア等、子どもたちを支える体制の充実・強化を図ることにしました。震災・防災・復興を教育課程に位置づけ指導することは、千年に一度の大震災に立ち会った私たちに課せられた義務でもあります。仙台市の教職員 3,000 名余りで構成する仙台市小学校教育研究会は、各教科領域部員の英知と力を結集して、長きにわたって取り組んでいくことを決意しました。

震災体験を乗り越えて、時代を切り拓く「生き抜く力」を持った子どもを育てるために、各教科領域においては、震災から学ぶ教育、復興を目指した教育が静かに始まっています。防災学習についての授業研究や実践発表、講演会を予定している部会もあり

ます。社会科部会では、副読本に被災前の美しい故郷の様子を掲載し、復興に向けた取組を紹介する予定です。理科部会では、自然分野の「自然、津波、大地のつくり」の学習を通して自然や災害に関する知識を身に付けさせます。図工部会では、アートが心のケアに有効であることから、避難所の表示やデザインで効果を発揮させたいと考えています。書写部会の「書きぞめ」では、子どもが希望を持てる字句を取り上げることによって復興への意欲を高めます。仙台市内の 6 年生が一堂に会する陸上記録会では、「復興のゴールめざし、進もう共に！」のスローガンを掲げて行進します。道徳の副読本には、震災号を特集して地域、避難所から募集した作品が掲載されます。特別活動部会では、各校の自主的な活動が、全市的な規模に広がるような取組を展開しています。音楽部会では、合唱団や吹奏楽団の街角コンサートやチャリティコンサート、地域を元気づける子どもたちの音楽活動など、音楽の持つ力を大いに生かした活動を行っています。

私の勤務校では、町内自主防災連合会が中心となって、大規模災害を想定した総合防災訓練を毎年、実施してきました。東日本大震災の時には、地震発生から 45 分後には対策本部が立ち上げられ、避難所の自主運営がなされました。21 世紀を担う子どもたちには、地域のために自治活動に参加できる大人に育ってほしいと心から思いました。

いま 生きて いること/ いっしょうけんめい
生きること/ なんて なんて すばらしい/ あ
すという日が くるかぎり/ 自分を 信じて/

（作曲・編曲 八木澤教司，作詞 山本瓊子

「あすという日が」より一部抜粋）

仙台市立八軒中学校合唱部が、復興のシンボル曲として歌った「あすという日が」の一部です。

子どもたちの明日が希望に満ちた未来につながるように、復興の担い手となる子どもたちの確かな成長を信じて、仙台市教職員の総力を挙げて息の長い復興教育に取り組んでいきたいと思ひます。

退会者からのメッセージ

後 輩 に 期 待 す る こ と



見えるものと見えないもの

高橋 享治（前 向山小学校）

退職を迎え近所を散歩する機会を多く持てるようになった。修理をしている家、取り壊し新しく建て替えている家、更地のままの所など様々な地域の住宅事情を見ることができる。

避難所の生活を余儀なくされている方々を考えれば、今までどおりの生活ができることだけでも有り難く、幸せであると感じる。復興は、がれきの処理も含め確実に進んでいるように思える。市役所前の広場でもいろいろなイベントが行われ、活気が戻って来たように見える。目に見えて復興していく様は見えてもうれしいものである。

しかし、あの大きな震災で失ったものには目に見えるものだけではなく、目に見えないものもあったのではないだろうか。伝統や文化、行事も次の代にきちんと伝わるように復興しているのであろうか。

形ある物はいつかは崩れる。しかし、あの時に感じた人と人の繋がりや助け合いの心は永遠に失ってはならないものであろう。地域に対する人々の思いもまた同じではないだろうか。復興とはこうした心の裏付けがあって始めて本当の復興と言えるのではないだろうか。

経済的な豊かさと精神的な豊かさのアンバランスが叫ばれて久しい。

将来を見据えた教育・指導が大切であると思う。日々、いろいろな課題を抱えながら学校経営に当たっておられる校長先生方の御苦労も大変なものがある。これからの時代を担っていく子どもたちを今、育てていることの重大さを共にかみしめていきたいものである。

希望の旗印を掲げて

早坂 保文（前 八幡小学校）

震災から1年3か月が過ぎた今なお、厳しい環境の中での教育を余儀なくされている学校もあります。全市を挙げての復興に向けた種々の取組や各学校の教育活動の充実を通し、子どもたちに笑顔が戻ってきたことはうれしい限りです。震災によるマイナス面をあげればきりがありませんが、一方で震災以降の日々の生活や教育活動の中で、人と人との絆、温かい思いやりの心、互いに協力し助け合う心など、多くのことを学ぶ機会にもなりました。

今年度、市立学校では「新たな防災教育の充実」を杜の都の学校教育の推進の基盤と位置付け、新たな視点や考え方による防災教育への取組が求められています。二度と起こってはほしくない大震災です。校長先生方には、東日本大震災の教訓をしっかりと受け止め、家庭や地域等との連携を更に強化しながら、「自助」「共助」の精神を持った子どもたちの育成に御尽力されるよう期待しています。

復興元年と位置づけた昨年でしたが、今年は更に未来に向けての創造的な教育を志向する一年であって欲しいと願っています。そのためには、これまで以上に校長先生のリーダーシップの下、教職員一人一人がそれぞれ創意工夫に努めながら教育活動や担当業務に当たることが求められます。教職員一人一人を生かす学校経営を通して、震災から立ち上がった新しい学校を創造してください。

最後に、75歳でエベレスト登頂を果たしたプロスキーヤー三浦雄一郎さんの言葉を贈ります。

「リーダーは、いつでもどんなに落ち込んでいようが何しようが、上機嫌で希望の旗印を掲げていなければならない。」

チャレンジの心をいつまでも

白幡 守雄（前 貝森小学校）

36年間の教員生活を無事に終えることができたのは、仙台市校長会の皆様に支えられ励ましていただいたからと思っています。感謝申し上げます。

4月1日から素直で元気な小学校1年生から3年生までの児童クラブ58名（蒲町小学校・荒浜小学校）の子どもたちに囲まれ、蒲町児童館でお世話になっています。バイパスを越して仙台市の東側で太平洋の近くに位置し、東日本大震災後の子どもたちの心を心配しましたが、毎日元気いっぱい生活している姿を見て安心しています。仮設住宅で定期的に読み聞かせをされている地域の方もいらっしゃったり、地域の中でお互い支えあっていることをお聞きし感動することもありました。

先日「館長さん、緑のカーテンを作って欲しいのですが。」の職員の声。過去に家庭でも経験のない私です。了承したものの不安でいっぱいでした。児童館は蒲町小学校の校庭の中にあり地面は砂地が多いのですが、植物の栽培のできる場所もあります。インターネットで方法を調べ、はしごで屋根に登り地面に向かって綱を掛け、アサガオ・ゴーヤなどの苗を購入して植えて一応出来上がり。私も何とかできるんだと自己満足。緑のカーテンが夏になり花が咲き、震災によって普段プレハブ校舎で生活している子どもたちの心の安らぎの一つとなることを願っています。子どもたちから元気をもっている毎日ですが、新しいことへのチャレンジと学ぶ気持ちも忘れずに生活したいと考えています。

健康であること

成田 順子（前 南中山小学校）

今通っている病院で、ある雑誌に連載されている、作家Sさんの「大人の精神力『孤独力』」について書いている文章に目が留まりました。その中で、吉田兼好の「徒然草」の一文「つれづれわぶる人は、いかなる心ならん。まぎる方なく、ただ一人あるのみこそよけれ（成すことがない寂しさをつらく思う人はどんな気持ちなのだろう。俗事から離

れ、ただ一人孤独の境地にいるのが最高なのに)」を引用し、「自分を取り戻し、味わうために必要なのが孤独力」と書いていました。

教員生活最後の年に、手術・治療のため、6か月近く学校を休み、退職直後の4月にも手術をし、現在、放射線治療中です。通院に時間を取られ、他に何もしていない今の私は、正に「つれづれわぶる人」です。病気を患う前は、（退職したら、子どもたちと関わることのできる第二の職場で頑張っていこう……）という思いもありましたが、それは叶わず、健康回復に専念しているところです。前述のSさんは、「孤独は自分を育ててくれる時間になる」とも書いています。また、「孤独力は自己の豊かさを意味する」とも。ここしばらくは、溺愛している犬に癒されながら自分を育てる時間を持ち、その後は、合唱団にでも入って多くの人と関わっていきたいと思っています。

現職にある校長先生方にとって、学校を取り巻く内外の諸環境に心休まることがないことでしょうか。時には、様々なことに考えを巡らせ、孤独を味わわれることもあるのではないのでしょうか。どうぞ、御自身のためにも、子どもたちのためにも、ストレスを溜めこまず、心身ともに健康第一でお過ごしください。

随 縁

吉田 利弘（前 愛子小学校）

私の38年間というささやかな教職人生の中に、その時その場での人とものとの多くの出会いがありました。縁（えにし）というもののなのでしょう、歩み続けるための大きな支えとなってきました。

私には、物として「水彩絵の具」との出会いがあります。子どもが遣っている同じ材料の可能性を追究し、それを指導に還元できればとの発想から始めた水彩画、今でも創作にいそしんでいます。この水彩画を続けてきたことが、ある意味精神面のバランスをとることに役立ってきました。芥川賞作家の青山七恵氏も同じようにしていたとのこと。彼女は旅行代理店に勤める傍ら小説を書いていた。そして、仕事に行き詰まると「いいの、私には小説があるから」と、仕事に行き詰まると「いいの、私に

は小説が……」と自分に言い聞かせてきたそうです。

言葉との出会いもあります。その一つに、あの実践哲学の祖、王陽明の「事情の磨錬」があります。最近、クローズアップされてきているOJTとも言えるでしょう。事を成すことによって学び、磨かれていくという教員の専門性を高めるための必須の考え方です。教育の世界には高邁な理論がたくさんあり、どれもが大切な考え方です。私たちの責務は、それらを理論だけで終わらせることなく、実践に結びつけることにあります。その際に、座右の銘としてきた言葉です。

最後に人との出会いです。物も言葉も、人を介しての出会いとなりました。目を閉じると、38年間公私にわたりたくさんの人に出会い支えられてきたことが浮かんできます。今、この原稿を読んでくださっている貴方もその一人です。 合 掌

「子ども一人一人の言葉 (母国語)」を育む

針持 哲郎 (前 小松島小学校)

35年の教員生活、というよりむしろ小学校入学以来54年間通い続けた学校生活を終えた、というのが現在の実感です。仙台市小学校長会の先生方には、公私にわたってお世話になり、心から感謝申し上げます次第です。本当に、ありがとうございました。

さて、私が教師の道に進もうと考えたとき、専攻として選んだのが、「言語障害児教育」でした。「どこか人と違っていたい」という持ち前のへそ曲がりを持ち上げたに違いありません。

人は1歳前後で話し始め、長い時間を掛けて自身の言葉を育んでいきます。その歩みは、一生涯とどまりません。言葉は、人と人、人と社会との関わりの中で生まれ使われます。人によって置かれた環境は異なりますから、育まれる言葉も一人一人によって違ってきます。正に一人一人が、それぞれに自身の「母国語」を育んでいるといえます。私たちが子どもと関わる時、一人一人に最大限の注意を払って聞いたり話をしたりするのは、そうしたことから考えています。今後も、「言葉」に関心を持ちながら、社会と関わっていきたいと思っています。

私たちの世代は、宮城県沖地震(昭和53年)から33年を経て、教員として二度目の大地震を経験しま

した。その体験を自身の「母国語」で語ることによって自身や周囲を客観視し、心の安定を図ったり人と関わったりしながら、次に向かって歩み始めているものと考えます。

復興2年目を迎え、学校教育を取り巻く諸情勢がますます厳しくなっている折、仙台市小学校長会の先生方には、健康に留意され、ますます御活躍されますことをお祈り申し上げます。

あるがままを受け入れ 共に生きる

竹内 久子 (前 柊江小学校)

子どもが通学する中学校の合唱祭に行ってきました。ステージ上で真剣に歌う子どもの姿に、胸の熱くなる思いでした。一緒に行った職員は、涙が止まりませんでした。

私が勤める児童養護施設には、2歳から18歳までの子ども50人が職員と生活を共にしています。一人一人の子どもの生い立ちも含め、全てをあるがままに受け入れ生活をしているのです。どこの家庭にもある様々な葛藤を乗り越えながら共に生活をしてきたことが走馬灯のように思い起こされ、ステージ上の子どもの姿、歌声に心が震えるのです。

学校を離れ4か月が経とうとしています。学校教育の中で育まれている子どもの姿に出会い、学校教育の素晴らしさを改めて実感しています。

先日、小学生が学校からのお便りを持ってきました。そこには、感謝の思いを込めて家庭で鶴を一只折ってください、と書いてありました。

昨年、8万人の児童・生徒で作った見事な七夕かざりが目に浮かんできました。

東日本大震災は大きな被害をもたらし、多くの方々が犠牲になられました。とても受け入れられることはありません。それでも、私たちは前に向かって歩んでいかなければなりません。復興までの道のりは、遠いものになりそうです。

あるがままを受け入れ、共に生きていくことは容易なことではありません。ともすれば折れそうになる心を支えてくれるのは、子どもたちであり、子どもを育てることに真剣に取り組んでいる職員です。

子どもと共に、祈りを込めて一只の鶴を折りたいと思っています。

学・社教育支援って？

内藤 恵子（前 七北田小学校）

某企業に再就職、会社員としてフルタイムの勤務に就いている。学・社教育支援部長～私に与えられた役割である。部スタッフは私含め7名、様々な職歴・経歴をもつ敏腕かつ感性豊かな集団だ。大変？いや、正直毎日が楽しい。好奇心をくすぐられる人・物・事との出会いがあるからだ。100枚の名刺は瞬間に無くなり、2箱目も順調に減っている。

校長として勤めさせていただいた川前小、七北田小では、「子どもたちへ多様で本物の教育を学校以外の力を借りて」ということに奔走した。教育界で様々な問題が起こり、学校や教師がバッシングされ、現場に閉塞感が漂う時代を経て、教育は学校・地域・保護者の3者協働で、という声が大きくなっていった。その中で心掛けたのは、自分自身も楽しむこと。いつの間にかのめり込み、土・日も出歩く私がいた。仕事ではあるが仕事以上の感覚…何よりも学校より広い世界に生きる、豊かで個性的な社会人との出会いが楽しかった。

小学校入学から一筋52年かかって学校を卒業した今、実質社会人1年生として、社会に浸り、社会から学校を見ることで、学校と社会の双方が元気になるような、そんな仕事をしたいと考えている。それが、これまでお世話になった方々、そして学校への恩返しと考えている。

震災の影響は私自身にもあり、津波で流失した岩手の実家の今後と、自分自身の生き方も悩ましい。会社勤めは、岩手と仙台を行き来したいという個人レベルの事情を理解していただいた上でのことだ。

震災で半壊、35年住んだ家を取り壊して更地とした隣地での農作業は、もう少しお預けにしておこう。

「天・・・地・・・人・・・」

菅原 泰徳（前 泉ヶ丘小学校）

にぎやかな小鳥たちのさえずりに目を覚まし、一日が始まる毎日です。微力な私を支え導いてくださった仙台市小学校長会の皆様に、改めて感謝申し上げます。

さて、あの東日本大震災から1年が過ぎ、多くの課題を抱えつつ、復興元年の学校経営に心血を注いでおられる校長先生方に心から敬意を表します。

それぞれがしっかりとした理念と信念の基に学校経営に取り組み、その実現に向けて御尽力していただけることと思います。

「校長は孤独である。」と言われますが、孤独であってはならないのも校長であると思います。

『天時不如地利 地利不如人和(天の時は地の利に如かず 地の利は人の和に如かず)』

これは、孟子の有名な言葉ですが、この中で「人の和」こそ最も大切であると説いています。

「内にも外にも開かれた学校づくり」「地域と共に歩む学校づくり」を言われて久しいですが、今こそ地域コミュニティとしての学校づくりが大切な時だろうと思います。教職員、児童・生徒、親や地域住民が協力・支援する体制づくりに努めていくことが大切であると思います。そのためには、親や地域住民とのコミュニケーションを深めることや教職員の和を図ることに努めることが大切であると思います。明るい職場づくりと地域との連携強化を推し進める中で、校長としての理念なり信念なりがしっかりと発揮されることを期待します。

釈迦に説法かも知れませんが、私なりに校長の頃の思いを述べさせていただきました。

最後に、仙台市小学校長会のますますの御発展を御祈念申し上げます。

笑顔が一番！

宮崎 吉輝（前 西山小学校）

小学校の見える姿として望まれるのは「子どもの笑顔」でしょうか。遊ぶ楽しさ、表現する楽しさ、学ぶ楽しさ、行事の楽しさ、行事をつくりあげる楽しさ、等々。計画的な教育活動や学校作り、学年・学級作りの中で、子どもの成長を図り、様々な楽しみの結果として、生き生きとした笑顔ができあがるのでしょうか。

子どもたちは、成功体験だけでなく失敗や間違い、友達同士のけんかからさえ、適正な指導のもとでは、豊かな糧としてたくましく成長していきます。

校長先生を先頭に指導の先生方は、本当によくがんばっていると思います。保護者の方々も子育てを必死でがんばっていると思います。「子どもを良くしたい」という同じ方向でがんばりましょう。

震災からの復興という面だけではなく、日々の教育活動や学校を取り巻く環境が厳しさを増している状況があります。校長として、難しい判断や決断を迫られることも増えているのではないのでしょうか。

校長は孤独です。孤独ではありますが、仙台市校長会として支え合う仲間がたくさんいます。優秀な職員もたくさんいます。校長先生が先頭に立って笑顔になって、先生方や子どもたちの笑顔の見本になってほしいと思います。

現在、私は児童館館長という職を得ています。子どもと関わることができる職場に喜びを感じつつ、小学校とは別の立場から、子どもたちの笑顔を支えていくことができればと思っています。

校長先生方には、くれぐれもお体を大切にされ、学校の中心で子どもたちの笑顔をつくり続けてほしいと思います。

冷え症なのか

伊藤 茂（前 桂小学校）

校長先生方におかれましては、復興に向け鋭意努力されていることと思います。在職中は、校長会の皆様は大変お世話になりました。ありがとうございました。

さて、本来ならば、依頼の趣旨に沿って危機管理やリスクマネジメント等を話題にすべきですが、あえて、震災とは関係のない、一昨年の出来事を伝えたいと思います。

当時、年度末に定年退職する女性職員がいました。毎年、水泳指導で補助役として協力してもらいました。プール開きを目前にした日、職員は、相談したいことがあると校長室に入って来ました。主訴は、「冷え症なのか、足を水につけると体が冷えるので、昨年同様の協力は難しい。」ということでした。私は、早急に医師の診察を受けるよう勧めました。

診断結果は、異常なしでした。訊いてみると、整形外科を受診したということです。私は、内科関係の病院を受診するよう、再度、勧めました。1週間後、

CT検査の結果、左側頭部に5ミリの動脈瘤が見つかりました。本人は、セカンドオピニオンでも同様の診断だったため、手術を決心しました。術後の経過も良好で、2か月半ほどして復職しました。その後、支障なく勤務し、3月に笑顔で退職しました。

「冷え症なのか」という言葉から受診を勧めなければ、動脈瘤も見つからなかったことでしょう。校長の職務は、職員の資質や能力をいかに向上させるかにあると考えますが、自身や職員の健康管理もその一つです。

これは、職員の体調にも目配り、気配り、心配りが必要だと改めて実感した出来事でした。

普段の教育活動

吉田 裕明（前 原町小学校）

校長会の皆様には大変お世話になりました。心から感謝申し上げます。

さて、私の校長職最後の1年間は、大震災の影響で緊張感を常に持って過ごした、苦勞の絶えない1年間でした。学校運営がハード・ソフト両面で大きく制限され、教育活動を進める上で様々な困難に直面いたしました。

しかし、そのような折には、近隣校はもちろんのこと、多くの校長先生方と情報交換をしたり物品の貸借をしたりするなどして対策を講じ、普段通りの活動には及ばないものの、子どもたちの満足した顔が得られる程度の活動は行うことはできました。校長会の地区活動や専門部活動において培った会員相互の協力を惜しまない精神が生きた場面であったと感じています。

今年度からは学校の環境も徐々に改善されていると思います。しかし、校舎がプレハブで校庭も使えないような環境の中、先生方の熱意と工夫とで乗り切るような教育活動は、正常な教育活動とは言えないと考えます。様々なイベントを行い、「復興だ」「復旧だ」と唱えても、うわべだけの復興にしかありません。どの学校においても教科学習や学校行事が当たり前に行われる状況に、普段の教育活動が粛々と遂行できる状態になってこそ初めて「復興」と言えるものと思います。

学校によって状況は大きく異なっていますが、

仙台市内すべての学校が一日も早く復興するように
仙台市小学校長会の皆様が一致協力して取り組み、
速やかにどの学校でも普段の教育活動が行われるよ
うになることを心から祈念いたします。

お世話になりました

千葉 茂仁（前 岩切小学校）

退職してから、もう3か月が過ぎましたが、校長先生方には、在職・在任中いろいろとお世話になり、ありがとうございました。特に最後の岩切小学校では、第7地区の校長先生方に支えられ、何とか地区会長を務めることができました。改めて感謝申し上げます。

退職後は、なるべく体を動かすように努めていることと職場での適度な緊張とで、体力・気力は今のところ、何とか在職時並みに維持できているようです。

私は現在、仙台市の外郭団体に勤務しております。再就職するに際し、自分がこれまで教員として、社会人として蓄積したものが、どの程度通用するのか試したい気持ちがありましたので、学校教育から距離を置くことにしました。また、自分のこれまでと違うところを自分なりに見つけてみたい、つまり「自分探し」をしてみたいと思ったからです。

現在の職場は、内科や小児科、外科等のお医者さんの診療をマネジメントする仕事ですが、午前8時半から午後5時までのフルタイムで、週5日間の勤務です。残業は無しなので、アフター5が有効に使えます。

子どもたちの歓声が聞こえない大人だけの今の職場は、少し寂しい気はしますが、自分で選んだ道なので、その分集中して仕事に取り組めるのもまたいいものです。

とはいえ、新聞記事やテレビ等のニュースではやはり、学校や子どもたちのことに目がいきます。職場の同僚の話題でも子どものことや学校のことが断然多くなっています。

社会全体が注視している学校の最高責任者として、仙台市小学校長会の更なる発展を祈念いたします。

お世話になりました

大槻 裕一（前 新田小学校）

新田小学校を最後に退職しました。初任校の石巻市立真野小学校から数えて3校目の勤務校であった新田小学校で再度働くことができたのは、うれしくもあり、また、少々恥ずかしいものもありました。

しかし、2年間、当時の教え子が保護者として来校してくれたり、教え子の保護者が地域の中心として活躍してくれていたりでする中で勤務できたことは、とても幸せでした。

勤務の最後の1年は、迎える直前に大震災があり、そのための対応に多くの時間がかかりました。加えて、震災前から計画が進んでいた校舎新築に関わる作業が、遅れたとはいえ予定通りの動きをするということになり、年度後半は、仮校舎の確認や引っ越し作業をも行うことになりました。そんなこともあり、私自身、あまり退職という実感もわかないままの1年間だったようにも思えます。振り返ってみると、あれもこれもやり残してしまい、周囲には大変迷惑を掛けてしまいました。

最後の1年間の勤務の中で改めて思ったのは、地域のまとまりの力のすごさや職員の協力体制の心強さ、仲間のありがたさでした。そして情報交換がいかに有効であるかということでした。そのことは、勤務期間、ずっと感じていたことでもありました。

悩みや迷いもありましたが、校長会の皆様はじめ地域の方々や仲間、みんなに支えていただきました。

お世話になった関係の方々に感謝申し上げ、また、これまで様々な、たくさんの御指導御助言いただいた仙台市小学校長会会員の皆様のますますの御発展をお祈りいたします。ありがとうございました。



笑顔に感謝

神田 雅樹（前 幸町小学校）

まさか教員生活の最後の年が、震災復興一年目になるうとは。退職の日まで日々はいつものように流れていくのが当たり前のことと思っていました。3月11日がやって来るまでは。先行きの見えない不安と戸惑いの中で始まった避難所運営。とにかく前へと進んで行かなければなりません。正直、何をどうしていたのか詳しくは思い出せません。しかし、臉に鮮明に焼き付いていることがあります。それは、ともすればエゴがむき出しになっても仕方がない状況下での笑顔でした。こごえる朝の挨拶、毎日の食事の配給、できる手伝いの申し出、誰からともなく始まったトイレ掃除、そこには必ず笑顔がありました。支えなければならぬ側が、その笑顔に支えられたのです。ボランティア、自衛隊、支援の手を差し伸べてくれた方々の笑顔にも力付けられました。笑顔があったからこそ難局を乗り越えられたのだと痛感させられました。今までに増してたくさん笑顔が見られるようにしていくことが、教職最後の年に課せられた仕事だと心に決めた瞬間でした。笑顔があふれる学校を目指し、子どもたち、先生方、保護者、地域の方々と一緒に取り組んだ一年はあっという間に過ぎ去っていきました。やるべきことはまだまだ残されていましたが、みんなと手を取り合ってきたことが何物にも代えがたい大切なものとして心に残っています。思えば教員生活においても笑顔に支えられてここまでやって来れたのだと今更ながらに感じています。今までに出会った全ての人たち、一人一人の笑顔に改めて感謝です。私もこれから笑顔を絶やさず過ごしていけるよう、一日一日を大切に積み重ねていくつもりです。

体内時計を修正中

唐沢 清（前 松森小学校）

震災復興元年と名付けられた平成23年度も、瞬間に過ぎ去ってしまいました。3月に大震災が発生し、学校が避難所となりました。学校再開に向けて職員とともに頑張っていたのですが、4月7日の余

震で始業式・入学式が18日となりました。生かされた命を大切に、子どもたちの明るい笑顔と元気で、家庭や地域の方々を明るく元気にしようと取り組んだことが、昨日のことのように思い出されます。

4月から、ひと・まち交流財団の一員となり、自宅に近い泉ヶ丘児童センターに勤めています。「ただいま」と、学校から帰ってくる子どもたちに、「お帰りなさい。」と、声を掛けています。まだ、児童センター勤務に慣れていませんが、子どもたちと関わりのある職場でうれしい日々を過ごしています。

ただ、体内時計が大幅修正となり、違和感があります。学校にいた頃は、一年を通してほぼ同じ時間帯の勤務でした。児童センターは少ない人数で運営されており、勤務時間は、早A（8:45～17:15）遅A（9:45～18:15）です。夏休みからは、この他に早B（7:45～15:15）遅B（11:00～19:30）の勤務時間が加わります。また、日曜日は公休ですが、児童センターは土曜日も開館しているため、平日に公休が割振りされます。それを4人でローテーションしています。

自宅からゆっくり通勤できるのはうれしいのですが、不規則な勤務時間なので、体内時計の修正に四苦八苦しています。

最後になりましたが、私は幸せな人間だと思っています。子どもたちや保護者の方々、地域の方々、そして、先輩方や同僚に恵まれ、教職をあとにすることができました。皆様方に感謝申し上げます。

自分の子どもや孫に・・・

高橋 智行（前 六郷小学校）

花壇の向日葵のあまりに速く伸びる茎と、もう伸びることは絶対ない自らの身体を比べ、人生のはかなさを痛感する今日この頃です。

37年ぶりの電車通勤（学）に、初めは胸をときめかせていましたが、スマホやガラケーでメールを打ち続ける日本人の圧倒的な多さに、我が国の行く末を案ずる毎日です。

この4月から、児童館に勤めていますが、学校とは違う子どもたちの素顔に触れて、悲観的な心が和むのが救いです。児童館は、学校とは違って、自分

の家だと思っている子がほとんどのようです。

児童館の子どもたちで気付いたことは三つ。

①一人遊びしかできない。

②他者との関わりが下手。

③思うようにいかないとすぐキレる。

体育館の1/4ほどの遊戯室と八畳間の図書室、サッカーや野球は厳禁の市民との併用のちっぽけな公園しかない劣悪な環境の中で、ひたすら親の迎えを待つ子どもたちに私がしたことは、次の三つ。

①集団遊びをしつこく追求する。

②館にいる間は、親になる。

③間違いは、親に代わって、徹底的に叱る。

つい先日、いままであまり私に話しかけない2年生の男の子が、「館長先生は、どうして僕たちを呼び捨てにするんですか。」と、問いかけてきました。

私は、「ここにいる子どもたちは全部私の子どもです。自分の子どもや孫に、さんやくんを付けますか。」と、返しました。

次の日から、一人遊びしかしなかったその子は、初めて私たちが遊ぶ輪に入っていたのでした。

自分らしく

米倉 清幸（前 七郷小学校）

「私たちの学校では陸上競技に力を入れています。

その他にも……」熱のこもった校長先生の説明が続いています。新たな職場近くの学校から評議員を依頼され、第1回目の会に参加しました。つい何か月か前までは、全く逆の立場で出席していましたが、とても新鮮な印象を受けました。そして、校長先生の学校経営への熱い思いを強く感じました。自分はどうだったのだろうかなどと今になって考えさせられもしました。

日々の生活に追われ、泥縄式の生き方の言い訳のように、過去を振り返ったり、感傷に浸ったりすることよりも今を大切に、前を向いてなどと話してきました。4月に仙台に入ってきた時の大恩ある校長先生が89歳でお亡くなりになりました。葬儀場の受付の横に写真が掲示してありました。30数年前の卒業式の写真でした。校長先生の隣に若き日の自分が座っていました。長男の誕生日にケーキを届けてくださったこと、転勤する度にお葉書をいただいたこ

と、そして震災後の対応を心から心配してくださったことなど走馬灯のように思い出されました。昨年の会で、80歳を超えて書かれた本を頂戴いたしました。

その本を見る度に感謝の気持ちとともに、残された人生を自分らしく生きたいと思うばかりです。

週に一度浜街道と言われる海岸線の道を通ることにしています。震災の爪痕深く、為すべきことは数多くあり、これからが本当に大切なのだと感じます。仙台市小学校長会のますますの御発展と皆様の御活躍を心から祈念しております。

あの時を忘れずに

田副 公一（前 大和小学校）

在職中には、先輩の校長先生、また同僚の校長先生そして仙台市小学校校長会の支えを得ながら、何とか職責を終えることができました。先生方とのつながりがあったので、いろいろ助けられたと強く感じています。本当にありがとうございました。

さて、私は現在児童館にお世話になっています。朝、時間に余裕ができ、毎朝散歩しています。歩いていると、ウォーキング・犬の散歩・ジョギングの人とすれ違い、自然に「おはようございます。」とあいさつを交わすようになり、いっそう朝がすがすがしくなりました。在職時には、震災復興の一つの活動として「あいさつ運動」に取り組んできましたが、あいさつの大切さを再認識しています。

児童館では、毎日低学年の子どもたちと遊んでいます。先日こんなことがありました。遊びの中で、福島県から引っ越してきた子どもに対し「放射能がうつる。」と言ってからかっていた場面を見かけました。その子は涙を流していました。その場で強く指導しましたが、このようなことが身近なところで起きたことに驚くとともに、この行為は許されないことであるし、言うてはいけないことであると、全体の児童に再度しっかり指導する必要があると痛感しました。

仙台市小学校長会の校長先生方は、復興に向け日々御苦労されていることでしょう。3・11あの時小学生は、人と人との関わり大切さを痛感しました。「助け合い、支え合い」などよく耳にしたもので

す。人の痛みを感じながら、何とかしようと活動する子どもを目指して学校の教育活動を進められるよう御期待申し上げます。

御支援に感謝

吉田 正志（前 西多賀小学校）

東日本大震災で西多賀小学校は、二校舎の一つ西校舎が使用できなくなりました。西校舎には5・6年生教室、理科室や家庭科室等の特別教室、給食調理室・配膳室、職員室等が入っており、新年度の教育活動に向けての課題が山積している状況でした。通常教育活動を確保すること、これが最大の課題でした。

4月からは、5・6年生は体育館で段ボールで仕切った教室でスタート。体育館の学習環境整備や給食センター対応の環境整備等の準備、その後の夏の暑さ対策としての冷風機や扇風機等、市教委の全面的御支援をいただきました。さらに、保護者説明会でも市教委関係各課より市としての対応について丁寧なお話をいただきました。

また、本校の不十分な学習環境を知った富沢中学校からは、特別教室と体育館の提供を、そして富沢小学校からは5・6年生の受け入れの申し出をいただきました。おかげで夏休み明けからは5・6年生は、落ち着いた環境で学習を展開することができました。郡山校長先生始め教職員の皆様が、温かい心配りで迎えてくださったことは今でも思い出されます。被災した本校の教育活動を展開する上で、富沢小・中学校、市教委そしてPTA等の全面的御支援とともに、地区校長会の皆様に温かい励ましをいただいたことも心強い支えになりました。

復興に当たった平成23年度は、校内での必死の取組とともに、それだけでは対応しきれない領域について関係の皆様に温かい御支援をいただいたことは大きな力であり励みでした。改めて衷心より御礼と感謝を申し上げます。

防災訓練は日常的に

木村 秀三（前 東長町小学校）

普段の訓練こそが如何に大事であったか痛感したのがあの時の私でした。3月11日のような大地震は今後発生することは少ないかもしれませんが、しかし、安全管理という観点では他の事例と共通します。危機的な場合の指揮は校長の個人の判断で行うことが多くなります。あらゆる緊急事態発生を想定し、訓練をしましょう。地震発生当日の校長の対応は校長会生徒指導部の調査によると様々でした。対応が全く逆の場合もありました。校長の対応や指示の是非は後に問われることにもなります。それが校長の責任であり職責の重さなのです。

不審者対策では集団下校という形が多いのですが、下校集団に車両が突っ込む事故が時々報道されている今日において集団下校で安全が確保できるのか、保護者への引き渡し訓練は全家庭参加の悉皆訓練として行っているのか、また、児童が行方不明になった時の職員体制など。全職員と訓練をすることが肝要であることを実感しています。防災教育としては、児童の意識の中に防災意識を持たせるための対応訓練以外の指導法確立など課題があります。私も微力でしたが引き渡し訓練は全家庭悉皆訓練にし、スムーズに終えることができました。集団下校は、依頼的避難から自己防災意識を促す一斉グループ下校にしました。

校長以上に学校全体を考える人はいません。現状把握の上でマニュアルを作り、マニュアルの活用訓練を日常的に行うことが定着度を高める秘訣だと思います。生きた計画確立に期待。



この時代に生きたものとして

齋藤 昭雄（前 鹿野小学校）

定年退職し、学校を離れて2か月余りが経過しました。働いている時の2か月というのはあっという間に過ぎたはずなのに、今は時間がゆっくりと流れているようでとても長く感じられ、学校現場で格闘していたのは、遠い昔のことのように思えるのです。

昨年3月11日の東日本大震災についても、同じような感覚になってしまうことがあり、「忘れてはいけない」と思い直し、時々、閑上の日和山に登っては津波被災地の現状を見てきました。

あの日から一年、がれきの撤去は進みましたが町の復興にはほど遠いものがあり、一面の更地のかなたに、人気のない学校の校舎だけが建っている景色を見ると、涙が溢れそうになります。「自分にできることは何だろう」「自分がやらなければならないことは何だろう」・・・。

私は、公募された「名取市都市計画審議会」の市民委員として、わが町名取の震災復興に力を尽くしたいと考えています。元教師としての経験を生かすというよりも、一市民として、「持続可能なまちづくり」を提言していきたいものですし、海岸林の再生に向けクロ松を植え続けたいと思っの応募でした。

この時代に生きたものとして、大震災から立ち上がり新しいまちを創っていくために。

今学校では、さまざまな難しい問題を抱えながらも、よりよい子どもを育てるための教育活動に努力していることと思います。何といても、これからの時代・新しいまちを創っていくには、今の子どもたちの力が必要です。共生の心を持ち、創造力豊かなたくましい人間を育ててほしい～学校教育に対する大きな期待は、「時代の希望」でもあるのです。

編集後記

児童生徒が復興の思いと感謝の気持ちを込めて作った七夕飾りが、今年も仙台の街に飾られています。復興元年と位置付けられた今年度、広報「廣瀬川」も復興に向けた取組に関する内容にいたしました。

「廣瀬川」80号を発行するにあたりまして、御多用の中、快く玉稿をお寄せいただきました御退職された先輩の皆様方、校長先生方に厚く御礼申し上げます。ありがとうございました。

編集担当者：愛田 勝彦（上愛子小） 高谷公美子（南小泉小） 狩野 孝彦（鶴巻小）
西 辰三（片平丁小） 石野 勝美（長町小）